

青梅市文化財ニュース

第220号

平成18年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会
青梅市郷土博物館

(青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859)

日常の中の仏教語 II

前回(第151号・平成12年5月15日発行)、阿弥陀如来に関わる『あみだに^{かぶ}被る』や『上品・下品』の話を書きましたが、今回はお経に関する『チンプンカンプン』についてふれてみたいと思います。

まず、お経という漢字ですが、この字には糸偏がついているようにそもそもは、糸に関係している言葉で^{たていと}縦糸の意味があるそうです。地球儀や世界地図に^{たて}縦に線を入れて位置を確認する言葉に^{とうけい}東経何度とか^{せいけい}西経何度とかいう言葉があります。これはその文字通り、ロンドンの旧グリニッジ天文台を通る本初子午線から東(または西)何度にある南北の縦の線ということですが、逆に^{ほくい}北緯とか^{なんい}南緯という時の緯は^い緯糸の意味があります。この経という文字には^{たていと}縦糸だけでなく、「すじみち」や「ことわり」の意味もあることから、仏教の教えを説く書物のことを『経』というようになりました。

また「^{きょう}経」の文字には普通「^{けいざい}経済」とか「^{けいか}経過」のように「けい」と読むことが多いのですが、仏教的には「きょう」と読みます。これは「けい」が中国の漢代の音、^{かんおん}漢音であるのに対して「きょう」は中国南部、^ご呉の国の音、^{ごおん}呉音で読むのが仏教の通例だからと言われていました。例えば『文部省(もんぶしょう)文化局(ぶんかきょく)』のように同じ「文」の字でも、「ぶん」と読めば漢音であり「もん」と読めば呉音になります。よって文殊菩薩は「もんじゅぼさつ」と読むことになります。ただし例外もありますので^{いちがい}一概にはいえませんが、鎌倉時代に^{どうげんぜんじ}道元禅師が書いた「正法眼蔵」は「しょうぼうげんぞう」と読み、「月光菩薩」を「がっこうぼさつ」と読むのもその一例です。

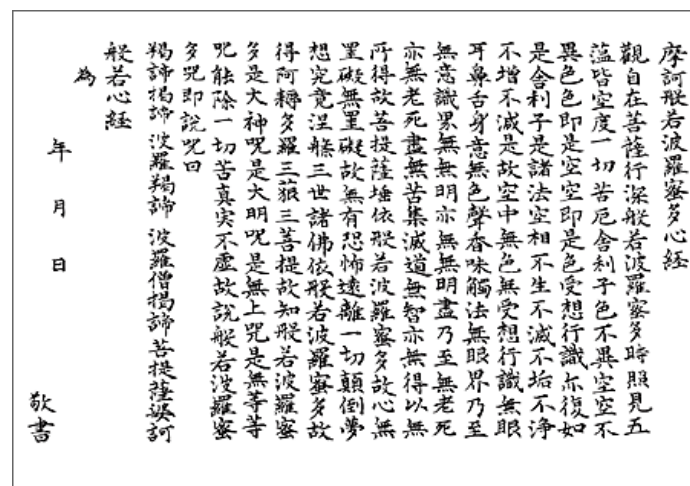
(裏面に続く)

さて、お経の中で一際有名なのが「般若心経」です。この般若心経に限らず、お経の中には漢字で書いてあっても漢字の意味とは無関係に、その漢字の音を使って当時のインドの言葉^{うつ}を写した部分が出てきます。般若心経の場合は最初のお経の題名である経題^{きょうだい}は「摩訶般若^{ま か はんにや}波羅蜜多心経^{はら み た しんぎょう}」と言いますが、心経^{しんぎょう}以外がインドの言葉を漢字の音に合わせた部分です。摩訶^{ま か}はインドの「マハー」という言葉の音を写したもので、そもそもは「凄い」、「素晴らしい」とか「優れている」との意味で、次の般若^{はんにや}は「パンニャー」という言葉の音写で「仏様の智慧^{ちえ}」と訳し、波羅蜜多^{はら み た}は「パーラミター」で「悟りの岸に至ること」だといわれています。

このようなことから「摩訶般若波羅蜜多心経^{ま か はんにや はら み た しんぎょう}」は、「素晴らしい仏様の智慧で悟りに到るおおもとのお経」となります。そのあと、お経の文章は漢文で書かれていきますが、途中で何回か同じようにインドの言葉を音写したものが出てきます。つまりお経には漢字で書いてあっても漢字の意味には関係無く、インドの当時の言葉を写したものであるためインドの言葉の意味が解らないと理解できない、ということで珍しい文章だという意味合いの「珍文^{ちんぶん}」となり、また、もちろん漢文^{かんぶん}でも書かれているので、お経というものは『珍文漢文』で、中国風に発音すると「チンプンカンプン」なものとなったようです。

以上のことから、今でも訳のわからないことを「彼の話はチンプンカンプンだ」というように使っているわけです。

(文責 棚橋正道)



般若心経・経文